

## 問題提起

**支援が必要な子ども・若者に対して  
社会教育は何ができるか？  
何をすべきか？**

放送大学 宮本みち子

# 高学歴社会における低学歴問題

- 高度化する社会で、高度化に付いていけない  
全体のレベルが上がっているなかで、格差がより際立つ
- 15～17歳の年齢で社会に出ても、ことごとく挫折して失敗体験ばかりを重ねることが多い
- 教育・訓練機会に恵まれず、キャリアを形成することができない

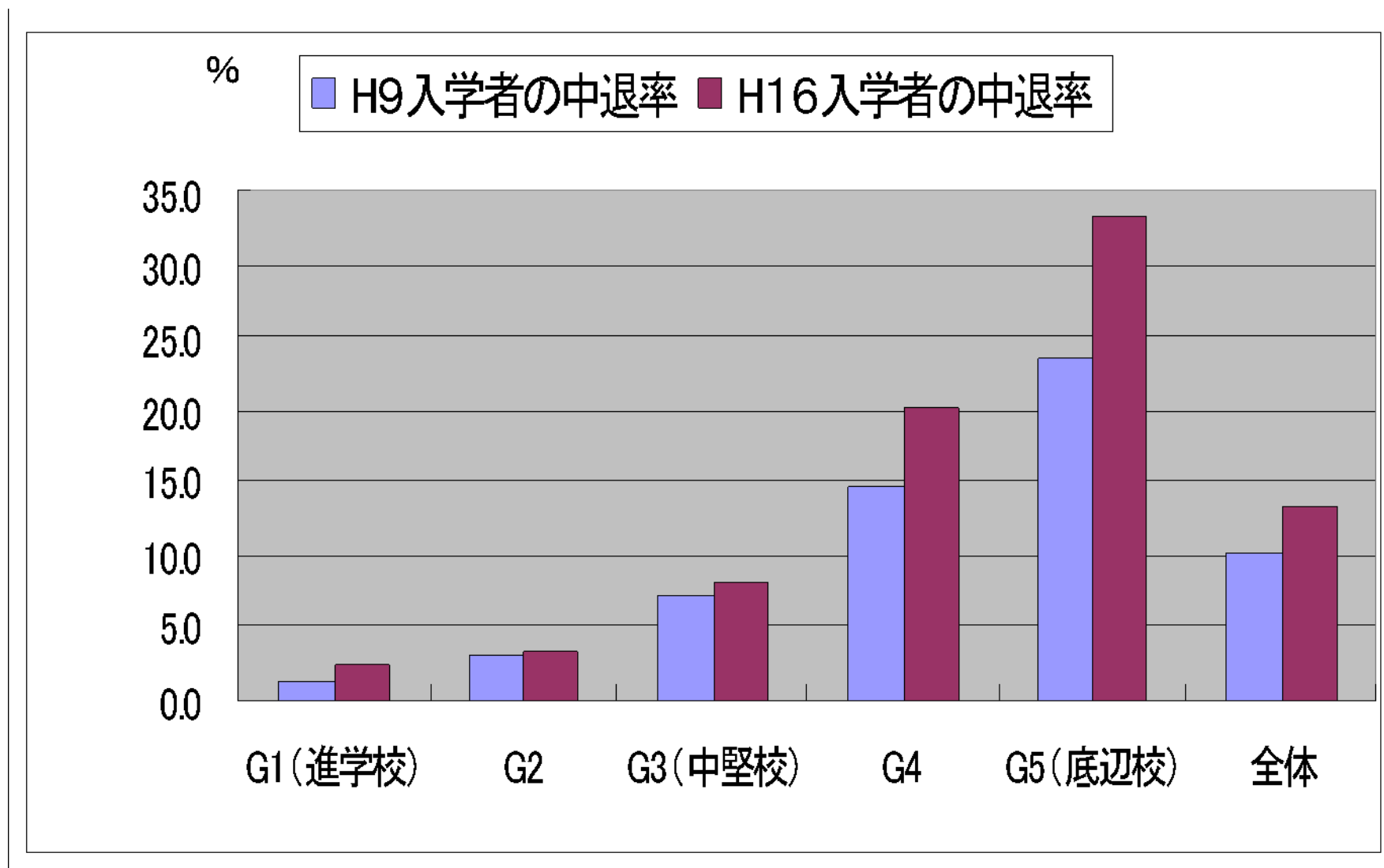
## 背景

- 家庭の貧困が背景にある例が少ない  
早い時期に親から経済的自立を迫られる高校生  
早期に親に頼られる高校生
- 低学力・家庭の貧困・親の離婚や家庭崩壊、いじめ、DV  
精神疾患など、現代のあらゆる矛盾を背負っている
- 自立するに必要な援助を親から得ることができない
- 親に代わる社会的支援の環境は手薄

# 増える高校中退：中退は偏在している

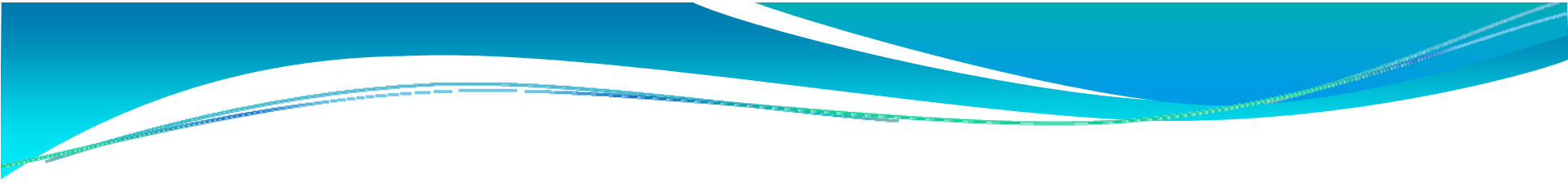
## 高校中退問題は象徴的現象

(埼玉県の場合)



# 「あなたにとって必要なこと」

進路や生活について何でも相談できる人	66.6%
生活や就労のための経済的補助	63.1%
<u>会社などでの職場実習の機会</u>	<u>56.3%</u>
仲間と出会え、一緒に活動できる施設	55.9%
低い家賃で住めるところ	55.7%
進路や生活などについて何でも相談できる施設	48.6%
<u>読み書き計算などの基礎的な学習への支援</u>	<u>33.6%</u>

- 
- アルバイトなどの不安定な就労から脱してキャリアを築く社会的に確立した道筋がない
  - 中退後の職業上の研鑽を積む機会がない
    - 「職業資格を取りたい」・・・約4割
    - 「職場実習を受けたい」・・・5割以上

**学卒と、安定した雇用の間の橋架けが必要**  
**就職活動困難な生徒には、在学中からゆるやかに社会へとつなぐしかけが必要**

## ■学力という問題

資格を取ることができないと思う理由  
基礎学力に自信がない(59.0%)

中退理由  
勉強がわからなかった(48.6%)  
欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった(54.9%)  
学力不振は中退後も就職に際して明らかに影響する

### 10名の聞き取り調査から

幼少～小学生 複雑で不安定な家庭環境のため勉強できる状態でない。頻繁な引越し、親の離婚・再婚  
親は子どもの学習に無関心  
小2～3の2ケタ足し算、九九の後半、分数・少数がわからない。

中学・・・授業についていけない。勉強に対する関心喪失

高校・・・はじめから勉強はあきらめ。自信のなさ。  
アルバイトが中心になる。しかしアルバイトもできない例もある。

その後・・・就職できなくても、アルバイトで働らかざるを得ない

低スキル・低賃金の単純労務市場へ

## OECD加盟国の若者の実態から

26カ国の15, 6歳～24歳のニート比率(失業者および不就業者)

失業リスクが高い集団

置き去り層: 中退、移民マイリティ、貧困地域、農村部、僻地

労働市場への統合が不完全な新規参入者:

安定した技能を有していない: 短期雇用、失業、無業を繰り返す

置き去り層に関しては、早期介入が必要

1) 就学前教育

2) 義務教育における学力

3) 後期中等教育を修了することを支援すること

### ■なぜ後期中等教育の修了が必要なのか?

職を確保するのに必要

これ以後の就業に際して、または離職に際して、学習できるための

最低限の要件

出所: OECD 2011, *Off to a Good Start? Jobs for Youth*

# 課 題

- 発見の課題：学校と連携すること  
学校段階で把握するのが一番
- 学校からドロップアウトさせないための支援  
生徒の生活を包括的にみる姿勢  
教育＋福祉＋精神保健＋就労のセット  
教師と学外人材の連携体制
- 学校から地域へとつなげる支援  
地域のどこに？ 中間的な場が必要  
学校、雇用という2大区分を前提には  
ならない
- 学習支援は単独では効果がない。コミュニティにお  
ける重層的な支援ネットワークのなかで機能する



# 「学校から社会へ」の架け橋

学校と家庭と労働の間を媒介する社会が必要

## ■ 学び・遊び・つながりの居場所

= 子ども・若者の孤立を防ぎ、学校から社会に繋がるまでの  
継続した受け止めの場

相談・基礎的な学び直し・キャリアカウンセリング  
・高校入試支援/ 仲間・スポーツ・遠足・キャンプ・・・

## ■ 成人基礎教育

例: adult basic education (米) essential skills (英)

## ■ 中間的就労(労働市場)

働くための準備・訓練の場

= ボランティア・職場体験・職業訓練・トライアル雇用

## ■ 社会への参加

社会的ネットワークの中に入る、社会を創る営みの一端を担う

# 活動を通して 若者の社会への参加を 活性化する

## 方法

- 社会サービスやユース・サービスが若者のための活動を作り出すという方法

若者の労働と社会参加の観点から非営利活動を担う団体を見直し、そこでの活動への参加を通して、学び直しや働くための訓練や社会への参加が可能になる

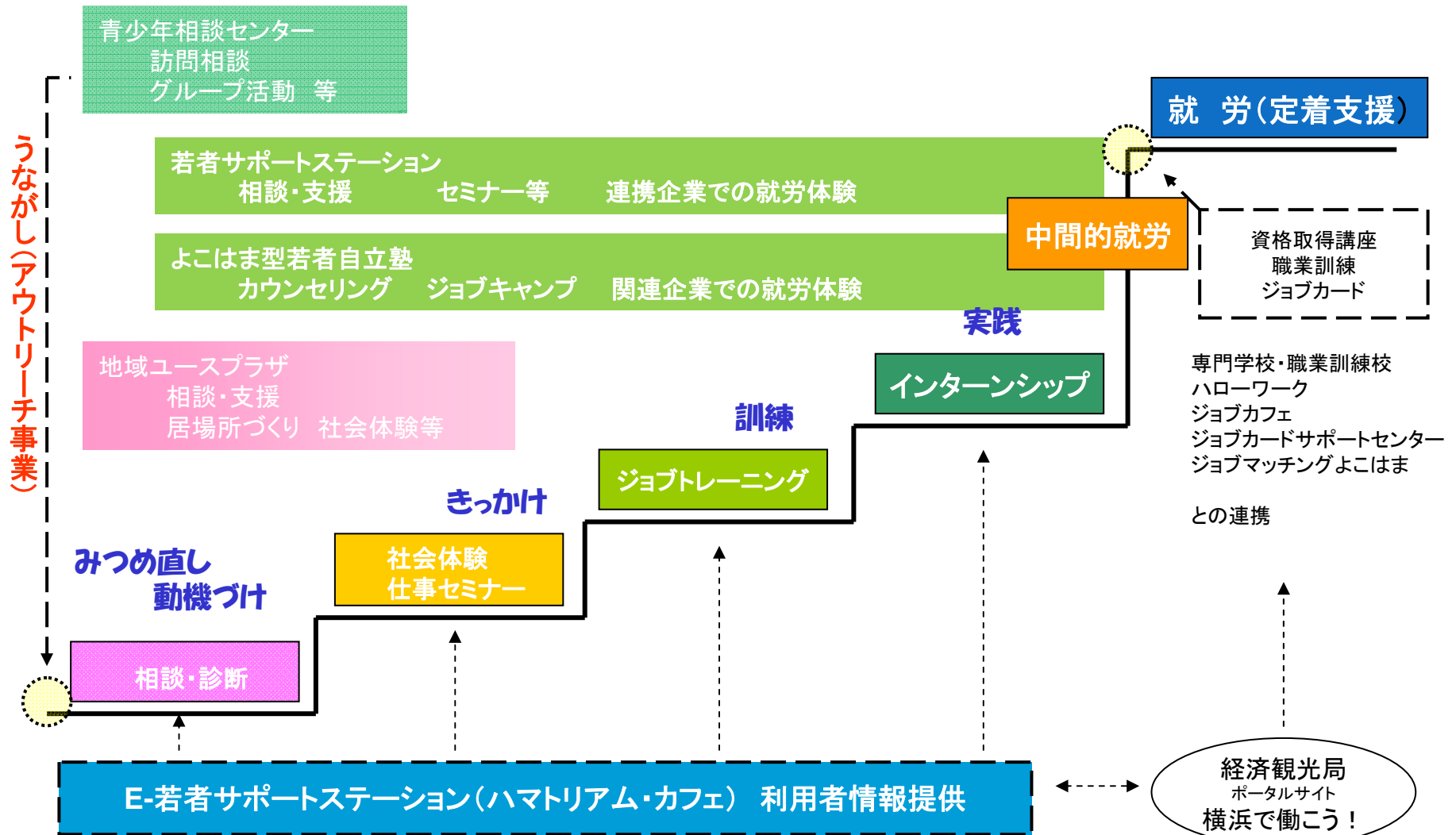
- コミュニティを活用して若者の動機作りをする

社会教育・ボランティア・社会体験学習などのノンフォーマル学習が、若者の生きる自信や動機付けに有効

**そのためのコミュニティの活用が重要**

# 横浜市の場合：次のステップアップにつながる就労支援の仕組み

社会参加の促進 → 職業意識顕在化 → コミュニケーション能力 自己表現が身に付く → 就労に向けた実践的能力の修得



# 海外の取り組みを例にして考える

フィンランドのワークショップ

オーストラリアのグリーン・コー

デンマークの生産学校

●いづれも早期離学、家庭や学力やメンタルな問題を抱えた15～19歳の若者が対象

●6カ月～2年、10人単位、実習中心の学びの場。参加者には訓練手当を支給

■職業教育・訓練は、学校や職場内の「閉じた」活動でなく、周囲の社会の生産・消費活動への、ゆるやかでリアルな参加・コミュニケーションの機会にもなることが重要

■困難を抱える若者の自立支援の目標は、仕事に就くことよりもまず「社会に参加させること」

■学校教育を補完する基礎学力は、リアルな活動と結合

中間的労働市場は、社会参加の場として意味をもっている

# 貧困の連鎖を教育面で断ち切る

- 奨学金制度が貧弱
- 教育に福祉的な手法を導入しないと、貧困の連鎖を食い止められない
  
- 子どもの教育・学習機会を保障する教育政策
- とくに就学前の子どもの教育保障
- 学校教育を補完する学習支援
  - 在学中
  - 中退・卒業後
- 親に対する「子どもの養育」に関する教育・啓発と支援
- 家族がもつ複合的なリスクに対する包括的な支援

# 地域若者サポートステーションの強化事業

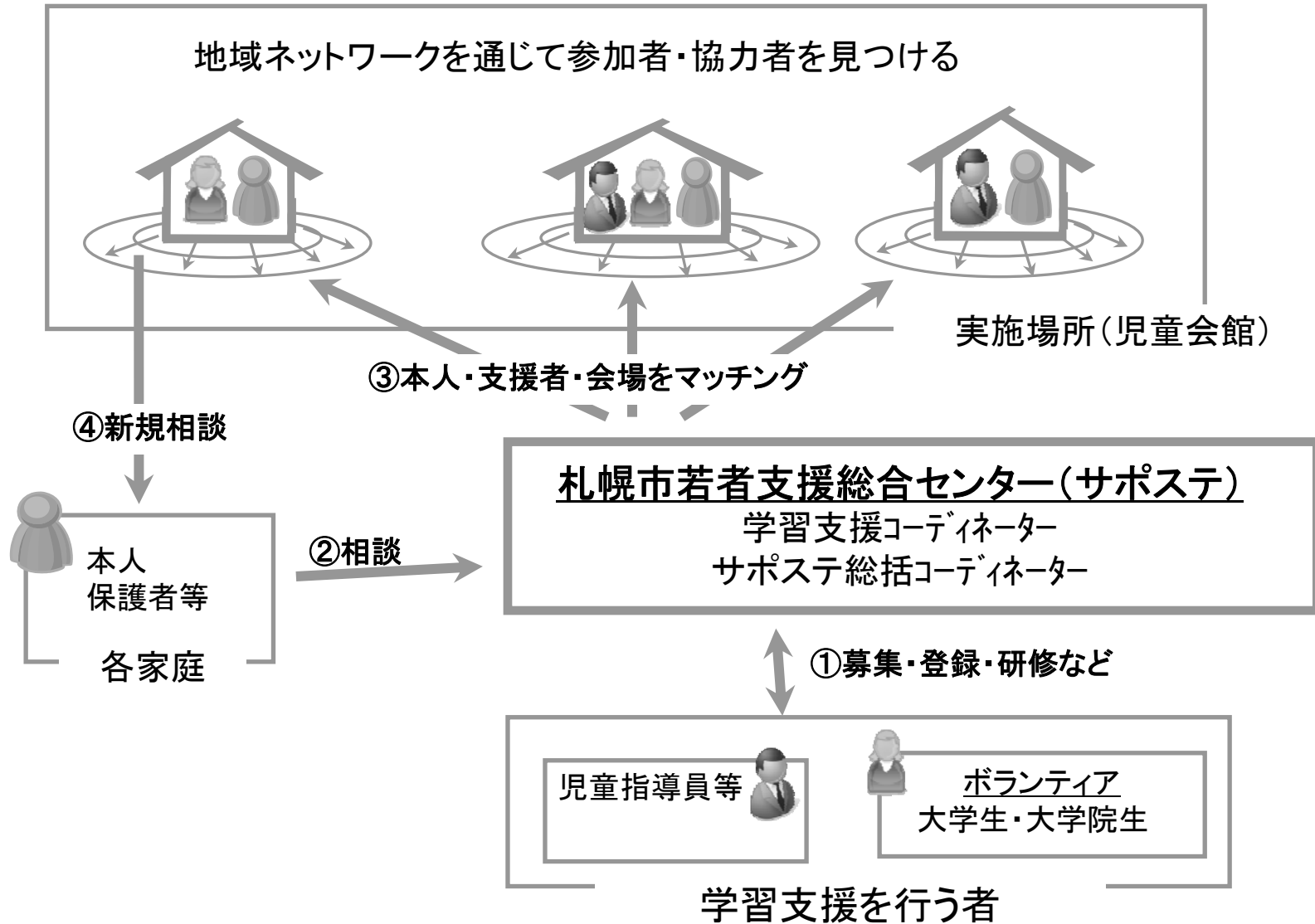
## ■ 高校中退者アウトリーチ事業

学校との連携の下、進路の決まっていない中退者をサポステに確実に結び付け、切れ目のない支援を通じて早期の自立・進路決定を促す、キャリア・コンサルタントによる訪問支援  
全国60か所

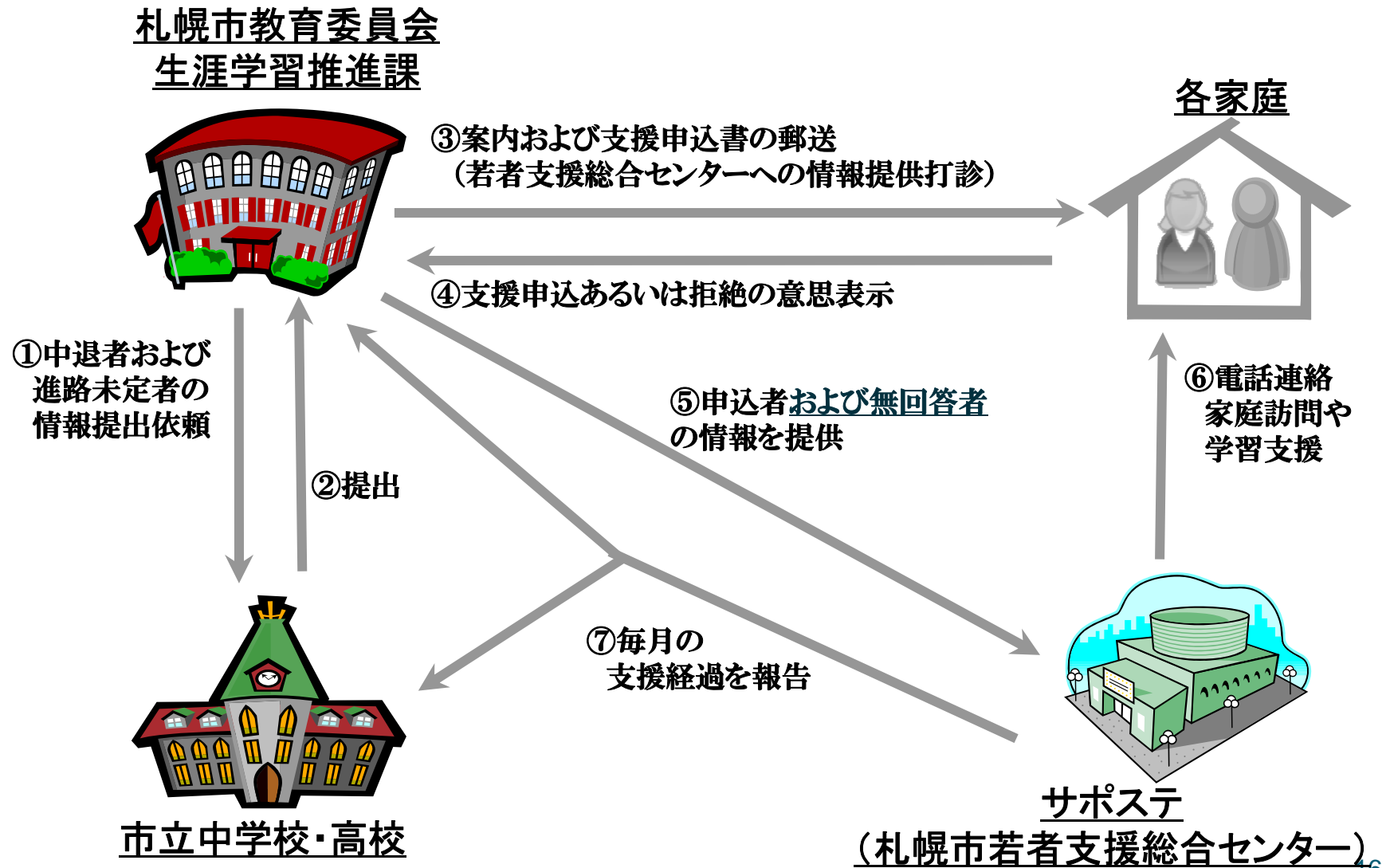
## ■ 継続支援事業

高校復学・高認試験受験支援、公的職業訓練に移行した者などを対象に、職業能力向上の前提となる生活習慣の改善、コミュニケーション能力等の向上のための支援  
全国15か所

# 事例 札幌市学びなおしサポートの仕組み



# 中学校卒業生等進路支援事業の仕組み





# **貧困家庭に育つ子ども・若者 複合的な困難を抱える子ども・若者に 教育投資の強化を！**

未来への投資としての社会保障という考え方  
可塑性に富む幼少期～児童期の  
教育に焦点を当てる  
社会との不完全な接続状態の若者への早期支援

**ポジティブ・ウェルフェア  
(積極的福祉)**

# 日本の貧困の連鎖

阿部彩(2011)

「子ども期の貧困が成人後の生活困難(デプリベーション)に与える影響の分析」

『季刊社会保障研究』第46巻第4号

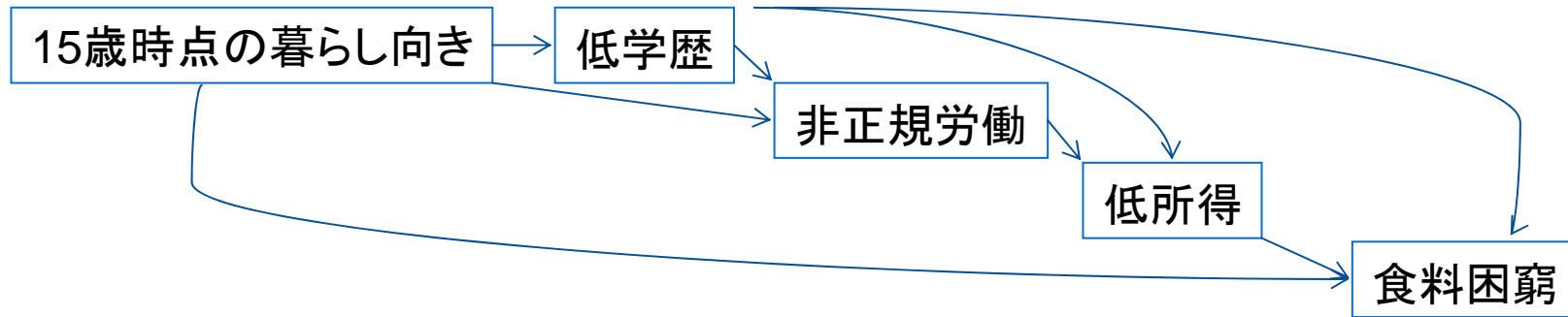


表 現在の生活困難に与える貧困要因の影響の内訳

	食糧困窮	衣料困窮	生活意識	受診抑制
子ども期の貧困の影響	17.6%	51.4%	54.9%	4.0%
低学歴の影響	51.5%	23.9%	9.2%	55.1%
非正規労働の影響	3.1%	-9.4%	12.8%	51.2%
現在低所得の影響	27.8%	34.0%	23.2%	-10.3%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

現在の20~49歳について分析

\* 現在の50~69歳よりも、貧困の連鎖は強固になっている

# 日本の貧困の連鎖

## 被生活保護母子家庭の母親の特徴

- 低学歴(中卒・高校中退) 49%
- 10代での出産 21%
- 非嫡出子のお産 31%
- 離別・死別など出身家庭の崩壊 76%
- 保護の世代間継承(成育時の受給) 35%
- 被DV歴 21%
- 精神疾患 36%
- 子どもに対する虐待 14%

(出所) 道中隆「被保護母子世帯における貧困の世代間連鎖と生活上の問題(特集 貧困・低所得世帯の実証分析--貧困問題 何がどこまで明らかになったのか)『三田学会雑誌』103(4), 619-

645, 2011-01